

フィギュアスケート競技で使用される音楽の研究 － 第15回オリンピック冬季大会（1988年）における女子シングルに焦点をあてて¹－

A Study of Music Used for Figure Skating: Focuses on the Ladies' Single at the 15th Winter Olympic Games in 1988

安原雅之 佐藤さくら[※]

YASUHARA Masayuki, SATOU Sakura

This paper focuses on the music used for the free skating by the medalists at the Olympic Games in Calgary, Canada, in 1988: Katarina Witt of East Germany (gold), Elizabeth Manly of Canada (silver) and Debi Thomas of the United States of America (Bronze). By identifying the music, defining the allotment of their segments, and relating them with the elements executed during the performances, the role of music for figure skating as athletic events is illuminated.

本論は、1988年2月にカナダのカルガリーで開催された第15回オリンピック冬季大会の、フィギュアスケート競技における、女子シングルのメダリストによるフリー・スケーティングの演技に焦点をあて、フィギュアスケート競技に使われる音楽の役割を考察することを目的としている。

1988年当時、国際競技大会におけるシングル・スケーティングは、次の3つの部分から構成されていた：a. コンパルソリー・フィギュア（規定された動作のスケーティング）²、b. ショート・プログラム（必要要素を伴ったもの）、c. フリー・スケーティング（スケーターの選んだ音楽で特に限定されない動作で一定時間滑走するもの）。そして、これら各競技の結果が確定したのち、各競技部分で得た各競技者の順位に、下記の係数を乗じた“順位点”が与えられ、それらの合計が少ないほど上位となり、最終的な順位が決定されていた（日本スケート連盟 1986:200）。

コンパルソリー・フィギュア	0.6 (30%)
ショート・プログラム	0.4 (20%)
フリー・スケーティング	1.0 (50%)

[※] 2015年度 愛知県立芸術大学音楽学部作曲専攻音楽学コース卒業。現在、浜松市楽器博物館勤務。

¹ 本論文における、フィギュアスケートの演技で使われた音楽とエレメンツの分析は主に佐藤が行い、全体のまとめは安原が担当した。

² 1990年3月に開催された世界選手権を最後に廃止された。

カルガリー大会のフィギュアスケートにおける女子シングルの上位3名は、次の通りである（右端の括弧内の数字は、順位点の合計）。

- 1位 金メダル：カタリナ・ヴィット Katarina Witt (1965-) [東ドイツ] (4.2)
- 2位 銀メダル：エリザベス・マンリー Elizabeth Manley (1965-) [カナダ] (4.6)
- 3位 銅メダル：デビ・トーマス Debi Thomas (1967-) [アメリカ] (6.0)

本論では、これら3名が、フリー・スケーティングで、どのような音楽を、どのように使用し、それらが、フリーの得点を獲得するためにどのように関与したのかを考察する。

1. 大会前の報道

東ドイツのカタリナ・ヴィットは、1984年のサラエヴォ大会で金メダルを獲得したあと、1984年と1985年の世界選手権で優勝している。1986年の世界選手権ではアメリカのデビ・トーマスが優勝し、ヴィットが2位に入ったが、カルガリー大会の前年、1987年には上位2名の順位が入れ替り、ヴィットが1位、トーマスが2位であった。このような流れのなかで、カルガリー大会開会前の報道では、これら2名が大きな注目を集めた。とりわけ、オリンピックのシーズンで、ヴィットとトーマス両者が、ともにビゼーの《カルメン》をフリーの曲に使用したため、カルガリーでの“カルメン対決”に関する報道が熱を帯びていった。

『ニューヨーク・タイムス New York Times』紙に掲載された「フィギュアスケート：良い状態のボイタノとトーマス」という見出しの記事（1988年1月11日）では、全米チャンピオンとしてオリンピックに参加する男子シングルのボイタノと、女子シングルのトーマスが非常に良い状態で、それぞれ宿敵のブライアン・オーサー（カナダ）とカタリナ・ヴィット（東ドイツ）と対決することに言及している。アメリカのニュース雑誌『タイム Time』は、大会直前の1988年2月15日号でオリンピック特集を組んでいるが、アメリカ版と国際版では、表紙の写真も、特集記事の内容も異なることは興味深い。

アメリカ版は「アメリカの恋人は、東ドイツのカタリナ・ヴィットを押しつけられるか？」という挑発的なコピーを添えて、デビ・トーマスの写真を表紙に掲載している。一方、国際版の方は、「東ドイツのカタリナ・ヴィット」の写真を掲載している。国際版のヴィットに関する報道が、ヴィットのスケートにおける芸術性を強調するだけでなく、彼女の美貌や、女優志願という彼女の演技力に言及する一方、アメリカ版の特集記事ではトーマスを大きく取り上げられ、彼女の運動能力の高さ、つまり、技術的にはヴィットを上回っているという点のほか、彼女が黒人であり、質素な家庭の出であることなどに触れ、あらゆる点でヴィットと好対照をなす二項対立の関係が築かれていった。

『タイム』誌 1988年2月15日号の表紙：アメリカ版（左）、国際版（右）



2. 結果

女子シングルにおけるトーマスとヴィットの“カルメン対決”ではヴィットに軍配が上がったが、3つの種目での競い合いは、二者択一ではなく、もっと複雑なものであった。

この大会の結果の詳細は、下記の表の通りである。

表：3つの順位点と最終的な順位

順位		順位点	CF	SP	FS
1	カタリナ・ヴィット	4.2	3 (1.8)	1 (0.4)	2 (2)
2	エリザベス・マンリー	4.6	4 (2.4)	3 (1.2)	1 (1)
3	デビ・トーマス	6	2 (1.2)	2 (0.8)	4 (4)

表3は、各選手のコンパルソリー・フィギュア（CF）、ショート・プログラム（SP）、フリー・スケートティング（FS）の3部門における順位と、その順位に与えられた順位点（括弧内）を示している。この表からわかるように、最初に実施されたコンパルソリー・フィギュアでは、トーマスが2位、ヴィットは3位であった³。次のショート・プログラム自体の順位は、ヴィットが1位、トーマスが2位、マンリーが3位であったが、ショートが終わった段階での得点を合算すると、トーマスが1位（2.0点）、ヴィットは2位（2.2点）であった。最終的にヴィットは1位となったが、フリーだけの結果では、マンリーが1位、ヴィットは2位で、トーマスは4位であった。

3. メダリストの演技におけるエレメンツと音楽について

ここでは、各選手のフリー・スケートティングのエレメンツ（構成要素）と、音楽の使い方について考察する。

³ コンパルソリー・フィギュアの1位は、ソヴィエトのキラ・イワノワ Kira Ivanova だった。

3.1 カタリナ・ヴィット

3.1.1 エレメンツについて

このプログラムには以下のエレメンツが含まれている。

- ① 3 トウループ + 2 トウループ ② 3 サルコウ ③ 3 トウループ ④ 2 アクセル ⑤ チェンジ・フット・コンビネーション・スピンの ⑥ レイバック・スピン ⑦ アップライト・スピン ⑧ 2 ループ ⑨ 3 サルコウ + 2 フリップ + シークエンス ⑩ 2 アクセル ⑪ フライング・キャメル・スピン

ジャンプ・エレメンツは、3 回転のものはトウループとサルコウの 2 種類である。また、エレメンツとして挙げるができる明白なステップは無いが、ヴィットのこのプログラムでは、ジャンプやスピンなどのエレメンツが、多数の短いステップのような動作で繋がれており、全体がひとつの大きな流れを形成している。

3.1.2 使用曲について・原曲との比較

使用曲は、ロシアの作曲家ロディオン・シCHEDロリン (1932-) による《カルメン組曲 *Karmen-syuita*》(1976) である。これは、ジョルジュ・ビゼーによる同名のオペラ作品の断片をバレエ用として編曲したもので、ヴィットのプログラムで使われた音楽は、この組曲の全 13 曲のうちの 5 曲から抜粋して構成されている。使用曲と使用部分は、下記の通りである。括弧内の時間は、参照した録音における使用部分の時間を示している。

1. from Schedrin's *Karmen-Syuita* I . Introduction (00:44 - 01:14)
- 2-1. from Schedrin's *Karmen-Syuita* II . Dance (00:00 - 01:00)
- 2-2. from Schedrin's *Karmen-Syuita* II . Dance (01:13 - 01:24)
3. from Schedrin's *Karmen-Syuita* V : Carmen's Entrance (00:55 - 02:18)
4. from Schedrin's *Karmen-Syuita* VI : Scene (00:36 - 01:02)
- 5-1. from Schedrin's *Karmen-Syuita* X III : Finale (03:30 - 04:08)
- 5-2. from Schedrin's *Karmen-Syuita* X III : Finale (05:19 - 05:23)

1 はチャイムの旋律が 3 回鳴らされる 00:44 から始められ、そのまま最後まで使用されている。1 と 2-1 は原曲でも途切れの無いアタッカで繋がっており、ここでもそのまま続けられている。2-1 と 2-2 は、主題の繰り返しを省いた形で繋がられている。2 と 3 はいずれも d-moll であり、2-2 の 01 : 24 が属 7 (e 音) のあと、3 の 00 : 55 の I の和音 (d 音) に移る。そのため、旋律の高低の差はあるが、曲の移行は違和感なく行われている。3 は使用曲の中で最長の 1 分 23 秒を占めており、その間は編集もなくそのまま使用されている。3 の 02:18 における D-dur の属 7 のあと、その和音は解決せずに 4 の 00:36 で e-moll の I の和音 I に繋がられるため、やや強引な印象は受ける。4 は 01:02 まで使用され、約 30 秒かけて曲が盛り上がりを迎えたところで、5 に繋がられる。

5は2つの部分で使用されている。03:30 - 04:08ではクライマックスの悲劇的な旋律が使用され、パーカッションが大きな音で鳴らされたのち、05:19 - 05:23に冒頭と同じチャイムの旋律が1回鳴らされて終わる。

全体的に、旋律がそのまま使用されていることが多い。1曲の中で編集した箇所は、繰り返しを省いたり、曲を終わらせるようにカットしたのみの簡潔なものとなっている。

3.1.3 エレメンツと音楽の関係

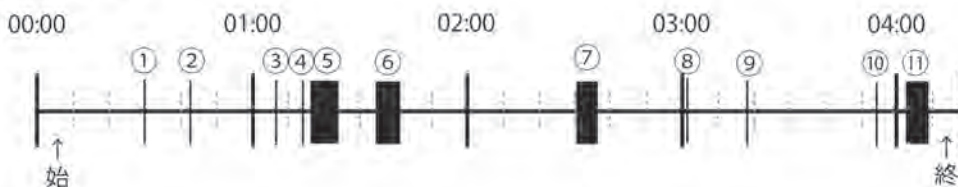
ヴィットは、冒頭でしばらく停止したままポーズをとり、2回目のチャイムの旋律から動作を始める。チャイムによる旋律のあと、2-1に向かう前奏のような部分から滑走を始めるが、音楽におけるトリルの持続によって緊張感が高まり、それに乗ってヴィットは最初のコンビネーション・ジャンプへ、スピードを上げながら助走を行う。そして、コンビネーション・ジャンプの①3トゥループ+2トゥループを実施すると同時に、動きのある2-1が始まる。次の2の終盤と⑥レイバック・スピンも対応しており、2-2が終わる際にスピンも終了し、3の冒頭の1音で決めのポーズをとっている。3はこのプログラムの「スローパート」となっており、音楽に合わせた振付を行っているが、エレメンツとみなされることはほとんど実施されていない。4はフィナーレに向かう盛り上がるの部分となっており、3と対照的に動作も激しくなっていく。5-1は最後の旋律が現れ、ヴィットは腹部を押さえるような振付を行う。これにより、彼女が演じるカルメンが刺されたことが分かる。そして最後のチャイムの旋律で倒れ込む振付をして終了する。

ヴィットのプログラムにおいて、赤を基調に黒をあしらった衣装も重要な役割を果たしていると言える。つまり、ヴィット自身がカルメンを演じることが、衣装からも明らかである。要所でカルメンを演じていることがわかる振付（誘惑する様子、刺殺される様子）もあり、物語を表現しているという点で、観客やジャッジにも振付の意図が分かりやすい。そして、チャイムの旋律で始まってチャイムの旋律で終了することや、組曲の中から順番通りに抜粋していることから、プログラム全体が、ひとつのプログラムとしての統一感をもっている。また、シCHEDリン版の《カルメン》は数多くの打楽器を効果的に使用した曲となっているが、プログラムでは打楽器に合わせてポーズをとるなど、バレエ的な要素も多く見受けられ、シCHEDリン版の原曲を生かしたものとなっている。

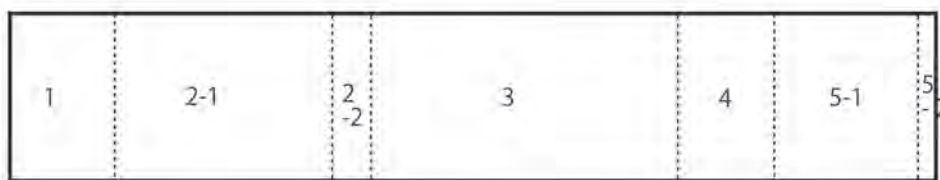
ヴィットのフリー・プログラムにおけるエレメンツと使用曲の配置は図1の通りである

図1: ヴィットのプログラム

エレメンツの配置



使用曲の配置



3.2 エリザベス・マンリー

3.2.1 エレメンツについて

このプログラムには以下のエレメンツが含まれている。

- ① 2 フリップ ② 3 ルッツ ③ 3 トウルーブ ④ 2 アクセル ⑤ フライング・アップライト・スピ
 ⑥ 3 ループ ⑦ 3 サルコウ ⑧ 2 フリップ ⑨ レイバック・スピ
 ⑩ サーペンタイン・ステップ ⑪ チェンジ・フット・コンビネーション・スピ
 ⑫ 3 フリップ + 1 ループ + 2 サルコウ ⑬ 2 アクセル ⑭ フライング・コンビネーション・スピ

ジャンプ・エレメンツには、3回転のものがアクセル以外の全種類、すなわちトウルーブ、サルコウ、ループ、フリップ、ルッツが全て組み込まれている。終盤にはトリプル・フリップで始まるジャンプ・シークエンスも実施されている。

3.2.2 使用曲について・原曲との比較

使用曲は、フランスの女性作曲家マルグリット・モノー Marguerite Monnot (1903-1961) によるミュージカル作品《*Irma La Douce* あなただけ今晚は》⁴と、ポーランド出身の作曲家クラウス・オガーマン Claus Ogermann (1930-2016) による〈カナディアン・コンチェルト *Canadian Concerto*〉(1963) である。使用曲の使用部分は、下記の通りである。括弧内の時間は、参照した録音における使用部分の時間を示している。

⁴ この作品にはミュージカル版と映画版があるが、ここではミュージカル版が使用されている。

- 1-1. from *Irma La Douce*, Overture (00:00 - 00:59)
- 1-2. from *Irma La Douce*, Overture (02:22 - 02:40)
2. from *Canadian Concerto* (第一主題部 Lento) (01:53 - 03:13)
3. from *Irma La Douce*, There is Only One Paris For That (03:10 - 03:40)
4. from *Irma La Douce*, Dis-Donc, Dis-Donc (02:26 - 02:51)
- 1-3. from *Irma La Douce*, Overture (02:42 - 03:13)

プログラムの大部分が《あなただけ今晚は》の明るく元気な曲調となっているが、中盤のロー・セクションには、ミュージカルとは無関係の〈カナディアン・コンチェルト〉が挿入されている。

セクションの区切りは曲のフレーズと呼応していることが多い。1-1 は最初から曲調が変わるところまで使用される。2-2 の最後の旋律は f 音で終えられ (02:40)、2 の旋律も f 音で始まる。ただし、これらの曲が変わる前後の調性は異なっている。また、3 と 4 の原曲には歌が含まれているが、歌詞を伴う音楽は使用してはならないという当時のルールに則り、器楽部分のみが使用されている。4 の 02:39 からは〈Overture〉にも登場する主題が使われており、02:51 のグリッサンドのあと 1-3 に繋げられるが、同じ主題が続くので曲の移行はスムーズに行われている。また、プログラムの最初と最後の曲が同じであることが、プログラム全体に統一感をもたらしている。

3.2.3 エレメンツと音楽の関係

曲が始まってからすぐに、マンリーはその場で歩く動作をしてからスケーティング動作を始める。1-1 の軽快なテンポに合わせて、スピードを加速させながら最初のジャンプ・エレメンツへと向かっていく。1-1 の 1 分間に、4 つのジャンプとスピン、計 5 つのエレメンツが続き、そのための助走が大部分を占めているが、助走中にも曲に合わせて手の動作を入れるなど、単なる助走にはしない工夫も見られる。そして、ジャンプも音楽の流れに対応した配置になっており、特に① 2 フリップ ② 3 ルッツ ④ 2 アクセルでは、旋律や主題の終わりの音に合わせて着氷するようタイミングが合わされている。1-1 のテンポが落ち着くところでスピン・エレメンツが行われ、続く 1-2 で再びテンポが上がるのに合わせて⑥ 3 ループの助走に入る。1-2 の終盤の盛り上がりに合わせて⑥ 3 ループを実施している。2 では落ち着いた曲調に合わせて、スパイラル動作などを多く盛り込んでいる。これまでの忙しい動作から一転して動作の美しさを強調する箇所が多く、イナ・バウアーから⑦ 3 サルコウを跳ぶなど、難しいエレメンツの入りも行っている。スピンの⑨ レイバック・スピンが行われたあと、2 の終了に合わせて一時停止する。3 は冒頭の曲調に戻るため、マンリーも再び加速しながらステップ・エレメンツ⑩ サーペンタイン・ステップを行う。3 と 4 の間はスピン⑪ チェンジ・フット・コンビネーション・スピンをを行い、4 の序盤では主に音に合わせて振り付けを行っているが、02:39 に入ると再び加速し、つなぎ動作も入れながら、旋律が盛り上がりグリッサンドするところでジャンプ⑫ 3 フリップ + 1 ループ + 2 サルコウを跳ぶ。その勢いのまま 1-3 に入り、ジャンプ⑬ 2 アクセルも旋律が終わるタイミングに合わせて着氷している。最後は冒頭と同じ歩

く動作を入れてプログラムを終了する。

マンリーのプログラムは、急—緩—急という3つの部分からなるフィギュアスケートでは一般的な構成であり、使用曲の物語を表現するのではなく、曲の性格に合わせた自由な振り付けが行われているが、また、エレメンツの入りや配置には技術的な工夫が見られ、特に音に合わせたジャンプの着氷では観客が盛り上がっているのがよくわかる。マンリーは、フリー・スケートで1位となり、最終順位は2位（銀メダル）となった。

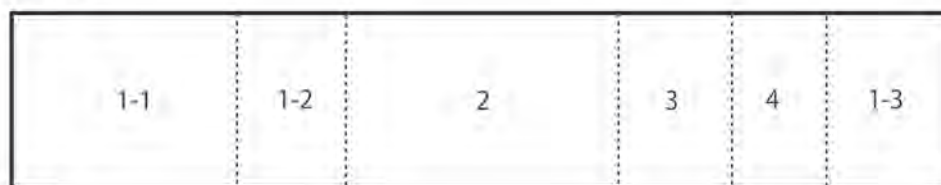
マンリーのフリー・プログラムにおけるエレメンツと使用曲の配置は図2の通りである。

図2：マンリーのプログラム

エレメンツの配置



使用曲の配置



3.3 デビ・トーマス

3.3.1 エレメンツについて

このプログラムには以下のエレメンツが含まれている。

- ① 3 トウループ + 3 トウループ ② 2 フリップ ③ 3 サルコウ + 2 トウループ ④ チェンジ・フット・コンビネーション・スピンの ⑤ 2 ループ ⑥ 2 アクセル ⑦ 3 ループ ⑧ レイバック・スピンの ⑨ 3 サルコウ ⑩ ストレート・ライン・ステップ ⑪ フライング・チェンジ・フット・コンビネーション・スピンの ⑫ 2 アクセル ⑬ フライング・チェンジ・フット・コンビネーション・スピンの

ジャンプ・エレメンツに含まれている3回転の種類は、トウループとサルコウの2種類である。トーマスは冒頭に連続3回転① 3 トウループ + 3 トウループを予定していたが、2つ目のトウルー

プはほとんど回転不足で着氷してしまった。

3.3.2 使用曲について・原曲との比較

使用曲は、ヴィットと同じ《カルメン》である。トーマスの場合はシchedリン版とビゼー版の2つを組み合わせて使用している。使用曲と使用部分は、下記の通りである。括弧内の時間は、参照した録音における使用部分の時間を示している。

1. from Shchedrin's *Karmen-syuita*, I. Introduction (00:49 - 01:14)
- 2-1. from Shchedrin's *Karmen-syuita*, II. Dance (00:00 - 00:54)
- 2-2. from Shchedrin's *Karmen-syuita*, II. Dance (02:00 - 02:09)
- 3-1. from Bizet's *Carmen Suite No. 1*, Prelude to Act III "Intermezzo" (00:00 - 00:39)
- 3-2. from Bizet's *Carmen Suite No. 1*, Prelude to Act III "Intermezzo" (01:13 - 01:45)
- 3-3. from Bizet's *Carmen Suite No. 1*, Prelude to Act III "Intermezzo" (01:52 - 02:03)
- 3-4. from Bizet's *Carmen Suite No. 1*, Prelude to Act III "Intermezzo" (02:10 - 02:20)
4. from Bizet's *Carmen Suite No. 2*, Danse Boheme, Gypsy Song from Act II (03:03 - 04:16)

シchedリン版のカルメンは1と2で使用されている。1はチャイムの音が2回鳴らされる00:49 - から始められている。これは、ヴィットのものとは比べるとチャイムの音が1回少ない。そしてそのままアタックで2-1に繋がられる。2-2は繰り返しを省略するように編集されている。2-1の00:54の箇所では、a-h-cis-d-eと上昇する旋律がd音でカットされ、2-2のe音に繋がられる。2-2はII. Danceの最後の部分で、一度曲が終結したのち、3-1へと移る。3-1～4も繰り返しを省略するように編集されている。同じ主題が何度か現れるので、細かくカットされている3曲目全体を通すとスムーズに聴こえ、3-4がIII. Intermezzoの原曲における最後の部分になっていて、曲が終結する。4は〈ジプシーの踊り〉の終盤から最後までカットすることなく使用されている。

一連の流れの中で、曲が一旦完結する部分が多いが、1曲1曲は反復を省いたり同じ音で対応するようにカットされるなど、違和感のないように編集されている。

3.3.3 エレメンツと音楽の関係

トーマスは、1の鐘の音が鳴ってすぐに動き始め、2回目の鐘の音が終わらないうちに最初のジャンプへの助走を始める。1の、2-1への前奏にあたる部分でジャンプ①3トゥループ+3トゥループを行い、2-1に入るところで音に合わせて闘牛士のような振り付けを行う。2のいたるところで腰に手を当てる仕草をし、力強さを表現している。2-2の終わりはスピンの終わりに対応しており、最後に一時停止して3-1へとつなげられる。3-1～4はスロー・セクションとなっており、スパイラルやイナ・バウアーを多用している。ジャンプの着氷も柔軟性を示すような姿勢になっている。3-4の終わりもスピンの終わりに対応して一時停止で終わっている。3-4と4の間には1秒ほどの

音のない部分があるが、4を待たずしてスケーティング動作に移っている。4からは再び荒々しい曲調になり、トーマスもホップやバレエジャンプのような動作を多く取り入れている。⑪フライング・チェンジ・フット・コンビネーション・スピンのあとは更に曲が盛り上がるのに合わせて、トーマスも速度を上げ、次のジャンプ⑫2アクセルへの助走に繋げている。このジャンプは、入る前にバレエジャンプを跳ぶ難しい入りになっている。そしてジャンプ⑫2アクセルの着氷後、続けて⑬フライング・チェンジ・フット・コンビネーション・スピンに入る。ここで音楽は同じ旋律を4回繰り返すが、旋律ごとに足を蹴り上げながら回転するフライング姿勢を取り、4つ目最後のパーカッションの音で一つ目の姿勢のスピンを終えポーズを取る。その後二つ目の姿勢のスピンを行って終了と共にプログラムを終える。

このシーズンまでの過去3年間、トーマスは、フリーで物語テーマ性のあるプログラムを組んでいなかった。このシーズンで、毎年物語性のあるものを選択してきたヴィットと同じテーマで演じることとなった。ヴィットと同じ《カルメン》を選曲し、しかも冒頭の音楽では、ヴィットと同じシCHEDリン編のイントロダクションを使用しているが、プログラム全体としては、導入部、スロー・セクション、そして終盤の構成で最後にかけて盛り上がるという急-緩-急の3部構成となっており、カルメンの物語は表現していない。ところどころ「カルメン」というテーマを意識した振り付けは見受けられるものの、ヴィットのものと比較すると物語性は希薄で、特に同じ曲を使用したシCHEDリン版の箇所では、パーカッションを多用したこの曲を扱った必然性はあまり感じられない。

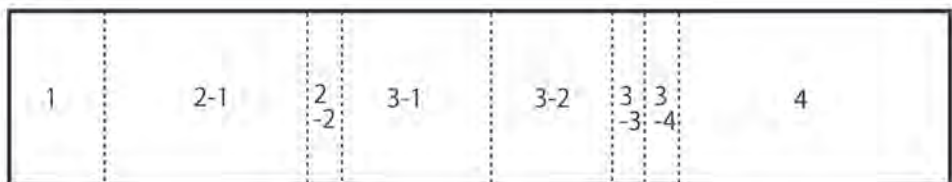
トーマスのフリー・プログラムにおけるエレメンツと使用曲の配置は図3の通りである。

図3：トーマスのプログラム

エレメンツの配置



使用曲の配置



4. フリーの演技結果とメダルの行方

フリーでは、テクニカル・メリット（技術的評価）と、アーティスティック・インプレッション（芸術的印象）が、それぞれ6点満点で採点される。カルガリー大会では9人のジャッジによって審査されており、9人がつけた素数の合計は次のような結果となった。

フリーの得点

順位		T	A	合計
1	マンリー	52.5	52.3	104.8
2	ヴィット	51.4	52.9	104.3
4	トーマス	50.7	51.0	101.7

T = テクニカル・メリット

A = アーティスティック・インプレッション

表から明らかなように、芸術点ではヴィットがマンリーを0.6点差で上回ったが、技術点では、難易度の高いエレメンツを実施したマンリーがヴィットを1.1点上回り、マンリーが合計104.8点でフリー1位となった。

ここで注目したいのは、アーティスティック・インプレッションの採点である。この採点については、ルールの第327条第2項において、次のことを考慮しなければならないと記載されている。

- a. プログラム全体の調和のとれた構成、および選択した音楽との適合性
- b. 氷面の利用
- c. 音楽にあった楽な動作と確実性
- d. 身のこなし
- e. 独創性
- f. 音楽の性格の表現（日本スケート連盟 1986:120）

エレメンツの難易度とその出来ばえは客観的に評価できるとしても、アーティスティック・インプレッションの採点が主観的になる傾向があることは否めない。しかし、このような採点の指針から、採点に際して、音楽がどのような役割を果たすのか、具体的に指摘することができよう。

より高い芸術点を得るために、たとえば「音楽にあった楽な動作と確実性 easy movement and sureness in time to music（下線は筆者による）」を見せるには、音楽のフレーズやリズムに合わせた振り付けが求められよう。また、上記のaにおける「適合性」やfの「音楽の性格の表現」

は抽象的ではあるが、「カルメン」という題材は、これらのような基準に当てはめた場合、非常にわかりやすい。その意味では、より物語性を強調したヴィットの方が、トーマスよりも高いアーティスティック・インプレッションの得点を得ることは、明らかなことであると言えよう。エレメンツの技術面では明らかに劣っているヴィットは、その差を埋めるべく、芸術点を得るための対策を十分に行ったと言える。そしてその対策は、音楽的な特徴をよりわかりやすく演技に反映させることであった。一方、マンリーのプログラムは、物語性は無いが、テンポの速い軽快な音楽を使用し、丁寧にリズムに合わせた動作を加えたり、ジャンプなどのエレメンツを音楽のフレーズに合わせることによって、音楽を生かした芸術的側面を強調したと言えるだろう。

換言すれば、アーティスティック・インプレッションで高得点を得るためには、選曲およびその切り取り方、すなわち、編集方法と、それに合わせた振付が重要である。このことは、フィギュアスケート競技においては、テクニカル・メリットの得点が拮抗した場合、アーティスティック・インプレッションの得点が勝敗に大きく影響するが、その得点については選曲とその曲のための振付如何によって、演技以前に差がついていることを意味していると言えるだろう。

大会前には、ヴィットとトーマスの対決が大きな注目を集めた。その結果としては、ヴィットが勝利を収め、ヴィットは、オリンピック連覇を果たした二人目の女子スケーターとなって名を残した。しかし、フリーでより注目を集め、フリーで1位になったのは、エキサイティングで澁刺とした演技を行ったマンリーだった。実際、スポーツ・イラストレイテッド誌は「二人のカルメン、つまりヴィットとアメリカのトーマスは、不発に終わった。東の芸術的美女 [ヴィット] と、西のアスレティックな競技者 [トーマス] は、カナダのマンリーと日本の伊藤によってより上手に滑られてしまった」と報じた (Swift 1988: 38)。またタイム誌は、伊藤みどりが、ヴィットも受けなかったスタンディング・オベーションを受けたことに言及し、伊藤の活躍をたたえた (Smolowe 1988)。伊藤は、フリーの順位は3位で、かつ、テクニカル・メリットでは1位 (52.9点) であった。それまでの女子には見られなかったほど高難度のエレメンツを組み込んだ伊藤の演技は、アーティスティック・インプレッションの得点に大きく左右されてきた女子の志向を大きく変えることとなった。実際、翌年の世界選手権で、伊藤みどりは技術点をさらに上げ、芸術面も向上させることによって、世界チャンピオンになり、スポーツとしてのフィギュアスケートを変えることになっていく。その後、高難度のジャンプが成功するか否かによって、技術的評価の得点がさらに大きく変動するようになっていくが、芸術的印象における音楽の役割は、その後も本質的には変わっていないように思われる。

主要参考文献

日本スケート連盟フィギュア部委員会規約部 '86 I. S. U. 規程翻訳小委員会編. 1986.『国際スケート連盟規定 I. S. U. Regulations 1986 ---一般規定、フィギュアスケート規定、アイスダンス規定 (抜粋)』日本スケート連盟。

Brand, David and Thomas Callahan. 1988. "Ice Queens: Stylish Duel for the Gold." *Time* (Australia edition), February 15. pp. 45-51.

Callahan, Tom. 1988. "Skater Dabi Thomas: The Word She Uses Is Invincible." *Time* (U. S. edition), February 15. pp. 44-57.

International Skating Union. 1992. *Results, Figure Skating Championships 1968-1991*. Terták, Elemér and Benjamin T. Wright eds. Davos Platz, Switzerland: Beat Häslar.

Smolowe, Jill. 1988. "Figure Skating: Katarina Witt took her golden place." *Time*. March 7.

<http://content.time.com/time/subscriber/printout/0.8816.966927.00.html> (2017年11月1日アクセス)

Swift, E. M. 1988. "To Witt, The Victory." *Sports Illustrated*. March 7. pp. 36-45.

ウェブサイト

国際オリンピック委員会のウェブサイトに掲載されたカルガリー大会：<https://www.olympic.org/calgary-1988> (2017年11月1日アクセス)

演技の動画

Katarina Witt - <https://www.youtube.com/watch?v=57R7aAY5QiM> (2017年11月1日アクセス)

Elizabeth Manly - <https://www.youtube.com/watch?v=hV179v0zjKM> (2017年11月1日アクセス)

Debi Thomas - <https://www.youtube.com/watch?v=gW4LqC33TiU> (2017年11月1日アクセス)

録音

Bizet, George. *Carmen Suites Nos. 1 and 2, L'Arlesienne Suites Nos. 1 and 2*. Philaderphia Orchestra, Eugene Ormandy, cond. SonyEssential Classics. SBK 48 159

Monnot, Marguerite. *Irma La Douce (Original Broadway Cast Recording)*. The Original Broadway Cast of Irma La Douce. 1960. Sony Broadway. (2017年11月1日 iTunes にてダウンロード)

Ogerman, Claus. *Canadian Concerto*. Orchestra by Kurt Edelhagen. <http://www.youtube.com/watch?v=XDmnT,AgSJw> (2017年11月1日アクセス)

Shchedrin, Rodion. *Carmen Suite (after G. Bizet)*. Bolshoi Theatre Orchestra, Gennady Dozhdestvensky, cond. MELCD1001630. <http://ml.naxos.jp/work/5362930> (2017年11月1日アクセス※要会員登録)